

「底が突き抜けた」時代の歩き方 367

援交からネット心中へと深まっていく 独りで耐えられない

日本の「寂しさ」

のち
後の漱石となる夏目金之助が留学したロンドンの滞在期間は、1900（明治33）年10月から1903（明治36）年1月にかけてである。ちょうど100年前であり、21世紀の幕開けであった。独立国家としての地歩を急ぐべく、「富国強兵」を最優先して、日清戦争（1894～95年）、台湾合併（1895年）、義和団事件出兵（1900年）といった周辺の有事に対処していった日本は、国際社会の中にじょじょに近代国家としての貌を突き出していった。「脱亜入欧」の理念に即して日本が英国と日英同盟を結んだのが、1902（明治35）年1月、漱石のロンドン滞在時であったから、彼の留学に当時の日本の国策が色濃く差し込んでいたことはいうまでもない。逆にいえば、漱石の留学は当時の日本が世界最大の富と文明を誇ったヴィクトリア朝大英帝国に近接した際の反応にほかならなかった。

漱石がロンドンで構想し、帰国後上梓した『文学論』の序には、「^{ロンドン}倫敦に住み暮らしたる二年は尤も^{もつと}不愉快の二年なり」と記されており、この「不愉快」の一言に後発国の先発国に対する感情を読み取ることができる。作家の関川夏央は『21世紀はいつはじまったか』（『中央公論』01・2）という文章で、ロンドン留学時代の漱石についてこう書き留めている。

《明治33年暮れにロンドンに達した夏目漱石は、排煙の厚くたちこめた空に、黄色くにじむいびつな太陽を見た。寒気のなかを足速に歩み去る、かたちもさだかではない人々の影を見た。

1月、ビクトリア女王が没した。漱石は弔意を表するために黒いネクタイを買いに行った。

その日の日記に漱石は英文でつぎのように書いた。

「偉大な女王は沈みゆく。ネクタイを包みながら店員が、`なにやら不吉な感じで20世紀がはじまりましたね`といった」

漱石はロンドンでは大学に籍を置かず、自学することにした。大学という郊外の閉鎖空間ではなく、市塵の中で生きることを望んだ。ただ、火曜日ごとに個人教授を受けた。アイルランド人の老いたシェークスピア学者で、女中とともにベーカー街の4階にひっそりと住んでいた。漱石は、そのクレイグという名の老学究や、転々した下宿屋の女主人たちの表情に、家族が分解し去ったあとに露出した限りない「さびしさ」を見た。

それは近代が必然的にもたらした「さびしさ」であった。漱石はロンドンにおける自分を、「狼群に伍する一匹のムク犬」と形容したが、それは日本そのものの姿であった。そして、近代の深化とともに日本もまた、たとえばポーア戦争凱進行進の殺伐たる靴音の中まじる、限りない「さびしさ」を味わうことになるのだと見とおした。漱石はそのときたまたまロンドンにあり、そうでなくとも鋭敏であった彼の神経が異郷の孤絶感にことさらに痛めつけられていたからこそ、20世紀の本質を体感したのである。日本の運命を予感したのである。》

漱石の『文学論』序に記されている漱石自身のイメージを辿れば、次の如くであった。「下宿に立て籠り(略)心理的に文学は如何なる必要あつて、この世に生れ、発達し、頽廃するかを(略)社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと」研究に没頭していった漱石は、しだいに精神生活をむしばまれ、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。(略)余が乞食の如き有様にてウェストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつつある此大都会の空氣の何千立方尺かを二年間に吐吞し」と書き付けずにはいられなかった。

「英国人は余を目して神経衰弱といへり。ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりといへる由。賢明なる人々の言ふ所に偽りなかるべし。」しかし、「神経衰弱と狂気とは否応なく余を駆つて創作の方面に向はしむる」ことになり、それ故、漱石はむしろ神経衰弱と狂気に「深く感謝」していると後にいう。神経衰弱と狂気が漱石を「創作の方面に向はし」めたことは事実として、その事実の背後には「創作」をもって襲いくる神経衰弱と狂気に抗わなければ、自分の身と心は滅ぼされるという切羽詰まった危機感が潜んでいたにちがひなかった。ロンドンの生活の中に近代が行き着いた果ての「さびしさ」を見出した漱石は、しかしながら、近代を大急ぎで駆け上がろうとする日本人の一人であり、彼が味わわねばならなかった神経衰弱と狂気は、近代の階梯に足をかけていながら、その階梯を上り切った果てに待ち受けているものの正体をすでに見てしまった者の悲劇と苦悩が喚び込んだ情動にほかならなかった。

漱石がロンドンの中で近代の行き着く果てに見出し、体感した「さびしさ」とはもう少し言葉を添えれば、瓦礫に瓦礫の積み重なった廢墟の中の「さびしさ」というものであった。その廢墟とはいふまでもなく建築物や市街の荒廢ではなく、「家族が分解し去った」個々人を襲っている精神風景のことである。したがって、漱石がロンドンで廢墟の中の「さびしさ」を見出したが故に、被らざるをえなかったともいえる精神衰弱と狂気は、やがて近代の階梯を駆け上がっていく日本が味わうことになる情動であり、第一次大戦を経て經濟の好況の波に乗った日本がどのようにして第二次大戦へと突入していったか、今更説明するまでもない。敗戦によって日本の各所で廢墟が垣間見られたが、しかし、その廢墟が突き出していたのは貧しさであって、「寂しさ」ではなかった。漱

石がロンドンで味わった廃墟の中の「寂しさ」に真に出会うのは、事実上の２０世紀の終焉とみなされる東西冷戦終結の、そして昭和天皇崩御の１９８９年以降である。

この１９８９年は下降期ながら、まだバブル時代の最中であり、関川夏央によれば、第一次大戦による《近代最初のバブル景気を迎えた》日本の２０世紀は、この１９８９年のバブルをもって終わるのである。《いまバブル時代をふりかえれば、それはたしかにうつろではあったが、元気な欲望の横行するにぎやかな時代であった。冷戦下の平和ほど、日本人にとって安定した時期は近代史上なかったのだとあらためて思い出される。私たちは虚栄心をひたすらにぎやかに浪費していたばかりで、すでに２１世紀の世界に突入してしまったなどとは気づきもしなかった。》バブル崩壊以降に現れた社会現象で注目され、大きく騒がれたのは、１４、５歳の少女と中年の男との組み合わせによる援助交際であった。

この援助交際が素人の少女売春にみえながら、それまでの職業売春の枠組みに収まりえなかったのは、カネと性の取引きの根底にエロス（生への衝動）よりもタナトス（死への衝動）が大きくかかえこまれていたからである。援交少女について調べれば調べるほど、そこにくっきりと浮かび上がってくるのは「寂しさ」であり、他方少女の「寂しさ」に付け込むように群がる中年の男に漂っているのも「寂しさ」であった。援助交際は日本が時代として迎えた「寂しさ」を抜きにしては成り立たない社会現象であると断言できる。この「寂しさ」は漱石がロンドン留学時代に味わった「さびしさ」と同質であり、《家族が分解し去ったあとに露出した限りない「さびしさ」》が通常の売春と援助交際を決定的に分かっていたのだ。この点をみなければ、援助交際とは単に職業売春が素人（少）女にまで拡大した社会現象にほかならなかった。

最近続出している若者のネット心中は、時代の「寂しさ」が深まるなかでの、援助交際を押し上げて行ったタナトス（死への衝動）の更なる深まりと考えられる。つまり、援助交際がなければネット心中もなかったし、近代化を達成した日本が家庭崩壊に見舞われていく「寂しさ」に直面しなければ、援助交際もネット心中もなかったといえる。

ネット心中の先駆けとしては、ネットを通じて入手した青酸カリを飲んで東京都内の女性（当時２４）が自殺し、送付した札幌市の塾講師（当時２７）もその後自殺した９８年の「ドクター・キリコ事件」が有名である。これはネットを媒介する別々の場所での自殺の例であり、ここからはネットを媒介する同じ場所での自殺がすでに透けてみえている。昨年１０月、東京都内のマンションで知り合った男女二人の心中事件が起きており、この心中が単にネットで知り合って仲よかった男女の心中なのか、それとも心中募集をネットで呼びかけただけの相手との心中であったのかはよくわからないが、先のドクター・キリコ事件にこの男女二人の心中事件を重ねると、ネットで心中を呼びかけて一緒に死んでいく、現在続出しているネット心中の型が容易に導きだされる。

ネットで集団自殺を呼びかけて、面識のない者同士がある場所に集まって同時に死ん

でいくという集団心中のかたちをはっきりと取った最初の事例は、03年2月11日、埼玉県入間市の空きアパートの一室で無職男性(26)と24歳の二人の女性が一酸化炭素中毒で死亡した出来事である。このネット心中はマスコミでもよく取り上げられており、『週刊朝日』(03・2・28)にはこう記されている。

《男性は以前から、自殺を希望する人たちが利用する複数のホームページ(HP)の掲示板に「心中募集」を出していたが、昨年12月9日にも、

練炭・コンロ・睡眠薬・密封できる部屋。全て揃え終わりました。参加したい人には、睡眠薬などを差し上げます。ただし、女性に限ります。(中略)本気の方お待ちしておりますと書き込んだ。ハンドルネームは、「月夜・美夕」。

だがこのネームは、わずか5日後の14日に、こう書き残して消えた。

募集終了 志願された方、ありがとうございました

男性のこうした呼びかけに、少なくとも今回死亡した川崎市のA子さん(24)と千葉県船橋市のB子さん(24)、さらに途中で心中計画から抜けた栃木県内の女子高校生(17)の3人が応募していた。

狭山署などによると、4人は一月上旬に、渋谷のカラオケボックスに集まり、5時間ほど心中の日取りなどを話し合った。死亡した女性2人は二月始めにかけ、一緒に箱根へ旅行にも行っている。

自殺を思いとどまった女子高生が、3人と連絡が取れなくなったことから今月11日、アパートへ様子を見に行き、死亡している3人を発見したのだった。

ハンドルネームのうち、「月夜」が男性のもので、「美夕」は別の人物だった可能性がある。というのも、男性のものとみられる初期の書き込みは、昨年10月21日にもあり、このときのネームは「月夜」だけ。一方、別の掲示板では9月16日に、「美夕」のネームで、「決意表明」と題された、一酸化炭素中毒死を希望する書き込みがあるのだ。

今年4月に首になり、それ以来、80社位就職活動をしてきました。成果はなく無職の状態です。おかげで、日に日に精神的苦痛が強くなってきました(中略)問題は、誰もいない廃墟や車を探していることです。(中略)心中相手募集をしている方がいるのなら誘ってもらえないでしょうか

「美夕」は、心中した女性のうちのどちらかだったのだろうか。》

『サンデー毎日』(03・3・9)の記事によると、呼びかけ人の男性は「やっぱり独りだと寂しい。本気の方、お待ちしております」と冒頭で語りかけ、「一酸化炭素中毒で逝こうと思っています。比較的に安楽死できるのでこのやり方を決め、必要道具は確保しています。参加される方を募集しています。男女は問いません」という書き込みを行っている。三人の各々の死の動機について先の『週刊朝日』には、女性の一人がアルバイトをしていた自宅近くのコンビニ店主の妻の証言として、「都内の大学へ浪人して入ったんですが、在学中も、卒業後も、何か自分の目指す方向とずれていて悩んでいたら

し」く、もう一人の女性の印象については、「セミロングの黒髪で、落ち着いた感じのお嬢さん」(近所の主婦)で、昨年、都内の保険会社を退職したことや、男性は昨年、出版販売会社を退職後、再就職できずに悩んでいたと記されている。

続いて記事によると、小、中学校の同級生の話では「キャラが薄い」印象の男性は、ネット上では雄弁で、「募集」締め切り後に男性のアドレスへ応募のメールを送り、《失敗しない一酸化炭素中毒死の方法》を尋ねた女性に、

メールありがとうございます。ただ、我々のグループは実行に向けてカウントダウンに入っています。なので、今回は難しいと思います(中略)来た文章を読んで思ったのですが、練炭専用のコンロが良いと思います。また、車があれば1人で簡単にできますよ。(睡)眠剤があれば安楽に近い死ができるとと思います という返事を送ったあと、更に翌日にも次のメールを送り、専門的なHPも紹介している。

《練炭は、焚くコツより、場所の密閉度や時間が大切です。専用コンロを使えば20時間焚き続けることができます。そして何よりも大切なのは、不完全燃焼を発生させることです(中略)空気の中の酸素は21%だといわれています。それが酸素不足により、酸素度が19%に低下したとき、物質は膨大のCO(一酸化炭素)を吐き出します(中略)もうひとつ大切なことは、24時間以上、誰にも発見されないことです。通報され未遂に終わるのは明らかです

そして参考のHPとして、4つのアドレスが紹介されているが、いずれも、きわめて専門的なHPばかり。なかでも、ある医療機関のHPは、一酸化炭素中毒死の医学的メカニズム、中毒の程度差による各症例、中毒による意識障害の継続時間と後遺症の関係など、とても素人には理解できない内容だ。アドレスを選んで紹介できるほど、男性はこうした知識を持っていたらどうか。

女性への最後のメールは2月3日、死亡推定日の1週間前。女性が、一酸化炭素中毒自殺に必要な機材の入手方法を尋ねたのに対し、ホームセンターでの購入を勧めている。自殺というのに、まるでマニアがプラモデルの作り方を情報交換しているようなノリである。》

以上の週刊誌二誌の記述から組み立てると、自殺現場の状況は次のようにイメージされる。三人は川の字になって横たわり、室内の四隅には練炭の入った七輪が一個ずつ置かれている。窓や部屋の入り口には粘着テープが張られ、畳の室内にはビニールシートが敷かれてあった。現場となった空きアパートは男性の自宅から道路と空き地を挟んだ真向かいにあり、コンクリート製の基礎に開けられている一部屋ごとの縁の下の通気口のうち、三人が死亡していた部屋の通気口だけが灰色の荷造りテープで塞がれ、更にその外側に密着させるようにブロックが積んであった。《一酸化炭素中毒で確実に死ぬため、それほどまでに部屋の気密性を追求したということなのだろうか。》と、『週刊朝日』には記されている。

このネット心中の後、3月5日に三重県津市の山中に止めた乗用車内での男、女、女の三人、4月21日には佐賀県富士町の林道で男、男の二人、5月6日には群馬県水上町の駐車場で男、女、女の三人、5月21日には群馬県上野村の車内で男、男、男の三人、5月24日には京都市伏見区のマンションで男、女、女の三人が死亡している。最初のネット集団心中の事例が、男、女、女の組み合わせ、練炭による一酸化炭素中毒死を範例として、後続に大きな影響を与えているのが見て取れる。3月5日の津市でのネット心中については『週刊新潮』(03・3・20)が記事を掲載しており、24歳の男性が車内に一緒にいる2人は本名も知らない、自殺するために出会った人です。なぜ自殺したいのかも互いに知らず、ただ安楽に死にたいという目的で集まった。……これで積年の悩みも解消されるというメモを残していることと、北九州市から駆けつけた23歳の女性には恋人がおり、4日前の3月1日に恋人とデートした帰り際に、3年間、いろいろと有難う。幸せでした。いっぱいキスをしたし、いっぱいエッチもしましたね……と明るく書き遣した手紙を渡していたことが注意を引く。記事は、《1人では自殺も出来ない若者達が考え出したネット心中は、妙に用意周到なところが不気味なのである。》と締め括っている。

『サンデー毎日』の記事は、ネットの自殺サイトや『2ちゃんねる』の中の自殺関連の書き込みから、「生きてるの、つらい。誰かと一緒に死ねるのも怖くないかもしれない」「楽に死ねる薬、どなたか売ってください」「たばこで本当に死ねるの？ 醤油の一升飲みは？」「自殺肯定論の哲学的意味って何よ？」などを引用した後、ネット上で心中相手を探している24歳の無職の男性と接触している。《「心中相手は誰でもいい。一緒に死んでくれれば寂しくないでしょ。本当に死ぬってことと、死にたいっていう気持ち、僕のなかで一直線につながっているんです。昔から僕は周りの人間に恵まれなかった。だから知らないうちにアウトキャストになっちゃう。もういいよって感じですね」

気弱さと、人を見下すような態度が同居している。傷つくのを恐れるあまり、自意識で完全に防御しているタイプに見えた。

「生きるって、すごい疲れる。死ねば疲れなくていいから。だから笑って死のうみみたいな感じ。自殺する僕をネットの動画で見せながら死んでいきたい。そんな自殺をずっと考えている」

また、取材を進めるなか、一通のメールが記者に入った。どこからか情報を得てアクセスしてくれた。相手先の年齢も職業も分からないが、「自殺を考えたこと、ある？」と質問をすると、「死にたいというより、消えたいって感じに近い。だって、死にたいっていうのは、誰かの関心を引く言葉だって知ってるからね」

さらに「死ぬってどういうこと？」という質問には、「解放されること。生きてるって、かたくなくてつらくて悲しいに決まってるから。そのご褒美が死」

何ともせつないが、軽いとも感じる回答だ》

記事は、東京都在住の高校一年、16歳の《切実な自殺志願者》の少女にも踏み入っている。彼女は「切ると頭が冷静になれるから。切ってると元の自分に戻れる」とリストカットし、「誰も私を必要としないから」毎日、「死ぬことばかり考えている」。両親は離婚しており、父親の暴力や母親、姉による邪魔者扱いから、自分のことを「イヤになるぐらい暗い」と卑下し、「人も好きになってくれない」とみなしている。月二万円の小遣いでは足りないので、「だから嫌だけど援交（援助交際）みたいなことをやってる。月に1回だけネットで探して、下着売ったり触らせたりで3万円。でも最後まで絶対にしない」が、援交によってより一層「自分を嫌い」になり、「心療内科に通うようになってちゃって。安定剤など薬を飲むと普通になれる。今は薬に依存している」。手にはリストカットの傷跡以外に吐きダコもあり、「過食症です。食べるとすごい罪悪感があって、すぐに吐き、両親にも学校の教師にも頼れず、援交によって大人に対する不信感が増し、独りぼっちな彼女の《唯一の逃げ場は、ネット上の会話だけだと言う。》「ネット友達と『ウサギだったらよかったのにね』って話してる。ウサギは寂しいと死んじゃうっていうでしょ。私は寂しいけど死ねない」

先の週刊誌以外に、「同じ境遇の人の書き込みを読むだけでいい。『じゃ、一緒に死のう』って、死ぬことを認めてくれると、すごくうれしい」(03・5・14付朝日新聞)といった声も聞こえてくる。援助交際の時にも感じたことだが、100年前の漱石がロンドンで味わった生活の廃墟の中の「寂しさ」を現在の日本で全国民的規模で見舞われている事態に身を置くと、一言、何とも非道い心象風景だという以外にない。日本人(だけではないが)はこんな廃墟を出現させるために戦後勤勉さを発揮してきたのかと呻きたくほど、若者の心象風景のどこにも「希望」というものが感じられない。少なくともマスメディアに浮かび上がってくる彼らのいくつかの呟きに接すると、死なないほうがどうかしていると思いたくなってくるのは確かである。個々人の呟きは一見孤立しているようにみえても、個々人の力ではもうどうすることもできない「寂しさ」の勢いの流れからポツポツ泡立ってくるのが感じられるのだ。

『サンデー毎日』には、東邦大医学部・高橋紳吾助教授の次のコメントが掲載されている。

《そもそも、心中というのは、`情死`とも呼ばれるように、男と女が道ならぬ恋に陥って死ぬということでした。ところが、ネット心中には情念の結びつきがない。つまり、一緒に死ぬ必然性がない。安易なんですね、自殺する発想が。

一緒に死ぬ、という行為は、結局のところ、孤独に耐えられないからですよ。旅行ツアーに参加する気分といおうか、みんなで渡れば怖くないといった気分。一人では怖いけれど、誰かと一緒なら怖さを半減できる、というわけです。

なぜ、そうなってしまったかということ、生にリアリティーを持てないからです。生のリアリティーを最も感じるのは、死の危険が迫った時です。だから戦争中とか飢餓が迫

った時代には、自殺は少ない。つまり、現代の日本は身近に死の危険がないんですよ。恵まれ過ぎて何でも手に入る。また、偏差値教育から落ちこぼれた子供たちは、将来が見えた気になってしまう。若いのに人生から`下りた`気分になっている。》

《生にリアリティーを持てな》くなっているために、《若いのに人生から`下りた`気分になっている》という指摘は、別に目新しいものではない。《生にリアリティーを持てない》のは、若者たちばかりではない。イイ年の大人たちもそうである。したがって、《人生から`下りた`気分になっている》のは若者も大人も同じであり、だからといって、大人が若者と同じように自殺に走るわけにはいかないのは、彼らが会社や家族の中で一定のポジションを占めているからだ。つまり、がんじがらめにされているからだ。

精神科医の香山リカは『論座』(01・6)掲載の文章で、《警察庁の集計によると過去5年間で殺人事件で検挙された49歳は185人で、これはすべての年齢を通じて最も多かったという》統計に言及している。団塊の世代として《人口そのものが多いのは事実なのだが、年齢別の人口比で見ても「50歳前後の殺人が最も多い」という結果になるらしい。ここ数年、「14歳」や「17歳」が凶悪犯罪との関連で話題になってきたが、実は彼らの父親たちの方がより危機的な状況にあったということなのだろうか。》この統計から導きだされるのは、《子の自立、親の介護や死、転勤や住宅問題、身体能力の減退など自分や周囲を取り巻くさまざまな状況が変化するのに加えて、長引く不況や価値観の多様化によりリストラや倒産、経営方針の転換などが我が身に振りかかってくる。あらゆる方向から「不安定さ」が押し寄せて来て精神的にダメージを受け、つい衝動に走ったりリスクをおかしてしまったりするのではないか。》という、専門家たちの分析である。

香山リカは、中年期に「変化」が否応なしに訪れるにもかかわらず、「変化」を受け入れたくない気持ちばかりが募って、《「備えあれば憂いなし」どころか「蓄えもなく憂いばかりある」状態》に陥り、押し寄せてくる「変化」の嵐の前でダメージがますます大きくなっていくという問題に目を向けるが、彼女も指摘するように、この「変化志向性の喪失」への個々人の取り組みが非常に困難に思われるのは、日本全体が「変化志向性の喪失」に陥っているからだ。彼女の文章から読み取れるのは、子供がキレる以上に大人もキレているのであり、子供が大人になるよう追い立てられているなら、大人もまた成熟した大人になるよう追い立てられているという光景である。ネット心中について考えるのに、したがって、いまのところは実行しているのは若者ばかりであるからといって、若者たちだけを見ていてもネット心中が突きつけている問題は見えてこないのは確かだ。

《旅行ツアーに参加する気分といおうか、みんなで渡れば怖くないといった気分。一人では怖いけれど、誰かと一緒なら怖さを半減できる》と思っているのは日本人全体であって、けっして若者たちばかりではない。むしろ若者たちは日本中に蔓延^{まんえん}しているその

空気をたっぷりと吸い込んで育ってきたにすぎない。《そもそも、心中というのは、`情死`とも呼ばれるように、男と女が道ならぬ恋に陥って死ぬということでした。ところが、ネット心中には情念の結びつきがない。つまり、一緒に死ぬ必然性がない。安易なんですね、自殺する発想が。》という先の指摘が「安易」なのは、心中＝情死というかつてのありかたからはネット心中は見えなくなっている、つまり、ネット心中はかつての心中＝情死と切断されていることの意味にあまりにも無頓着なことである。

援助交際には《情念の結びつきがない。》つまり、セックスする《必然性がない》と読み替えるなら、その指摘は現代社会の根本的な変容に対して致命的な無知をさらけだしているといえる。《情念の結びつき》を敬遠しているところにネット心中はあるし、それは《一緒に死ぬ》ことだけを目的にしているのである。だから、《一緒に死ぬ、という行為は、結局のところ、孤独に耐えられないから》とみるだけでは、半面しか捉えることができない。ここで3月5日に津市の山中で発見されたネット心中に参加した北九州市の女性の例を俎上にのせてみる。もはやかつての心中＝情死が成り立たなくなっている問題が、そこに浮き彫りにされているからだ。女性には自殺の4日前にデートをした恋人がいたにもかかわらず、別のグループとのネット心中に加わり、しかもそのデートの帰りに遺書まで手渡しているのである。

地元の企業で事務員をしていた女性の自殺の動機については、大手紙の社会部記者が「3年越しの恋人もありました。ぽっちゃりとした可愛い顔立ちそのままの、明るい子だったそうです。しかし車のローンやパソコン機器の購入代などの借金が全部で300万円あり、自殺の原因も、この借金を苦にしたものと思われます」といっているが、女性は借金やその悩みなどを恋人に打ち明け、二人の問題にすることを回避したと考えられる。かつての心中＝情死の物語であれば、女性は恋人にすべてを打ち明け、二人で金の工面などに奔走した拳句、どうにもなくなって二人で情死に至るというのがよくある筋書きであった。だいいち「300万円」程度の借金なら、今時どうにもならない額ではなかった。もし彼女が恋人に相談して、恋人がその相談に乗っていたなら、借金は解決されて二人はより仲睦まじくなり、結婚へ行きつくというコースがみえていたかもしれない。

ところが、おそらく女性は恋人に自分の借金を打ち明けずに、別れの手紙を手渡して見ず知らずの人間との心中に走ったのである。ここに心中＝情死が現代社会における若い男女の間では禁じられているのを覗くことができる。女性が自分の悩みを恋人に打ち明けなかったのは、そうしようと思いつきながら出来なかったのではなく、元々打ち明ける気がなかったからだと思測される。そして打ち明ける気がなかったのは、恋人は自分の悩みを打ち明けるような相手ではないと予め考えられていたからではなかったか。恋人との関係はお互いに悩みなどを打ち明けないところで維持され、成り立っていたように思われる。お互いの悩みを共有し合うような恋人関係であったなら、心中＝情死の物語

は連綿と打ち続いていたにちがいないし、少なくとも恋人が存在しながら、見ず知らずの他人と一緒に自殺するなどという、これまでからすれば奇妙な事態が起こりうる筈もなかった。

心中＝情死に行きつかずに他人とのネット心中が選択されることになるのは、心中＝情死に行きつくような恋愛関係ではなくなったということにほかならない。おそらくネット心中が問題であるよりも、恋愛のあり方が根底から一変してしまったために、心中は恋人よりも他人を選択するという一見奇妙な事態を招来しているのだ。しかしながら、恋人との関係は自分の素顔をできるだけ包み隠して、着飾ったよそゆきの自分をよりよく見せつける関係であり、自分の悩みなど打ち明けるなんてとんでもないという考えに立つなら、心中＝情死よりもネット心中が選択されるのは必然であるといわねばならない。３年間、いろいろと有難う。幸せでした。いっぱいキスをしたし、いっぱいエッチもしましたね…… という恋人宛の遺書からは、もう恋人との関係が維持できなくなるほどに女性の悩みが膨らんできており、その悩みを解消するために別の見知らぬ関係へと旅立つことの別れが告知されているのがやるせなく伝わってくる。

だが、ここでも疑問が起こる。心中＝情死が元から回避されているなら、ネット心中以外に独り自殺という方法も考えられる。なぜ独り自殺が選択されないのか。独りは「寂しい」からである。恋人との関係も「寂しさ」を紛らわしてくれる点が最大の理由であったようにみえる。自分の悩みが膨らんできて恋人との関係がもはや維持できなくなったとき、そこで失われる「寂しさ」をかりうじて繋ぎ止めてくれるのがネット心中であった。《ネット心中には情念の結びつきがない。つまり、一緒に死ぬ必然性がない。》とか、《一緒に死ぬ、という行為は、結局のところ、孤独に耐えられないからですよ。》と指摘される所以であるが、そこで見落とされているのは、死ぬことを目的とした集まりでつながる物語の発生という視点である。

《孤独に耐えられない》のは老若男女を問わないし、生きているときも死ぬときもそうである。《孤独に耐えられない》生き方をしてきた者が、独りで死ぬことに耐えられないのは当然であろう。ネット心中が単に《一緒に死ぬ》だけであるように思われたいのは、一緒に死んだ後のつながりも想定しているのが感じられるからである。交際してくれる相手を探していますという書き込みへの反応はゼロであっても、一緒に死ぬ人を募集しています、但し若い女性という条件付きの書き込みに、応募者が現れるという現象には、死ぬことを前提とすることによってしか、匿名であれ何であれ、異性とのつながりの場面が実現されえないという逆説が垣間見られる。ネット心中に対する批判がどのように強かるうとも、《一緒に死ぬ》ことが死後の世界での、生存中一度も紡ぎ出すことのできなかった物語を垣間見させてくれるように思われていることが、ネット心中に対する若者たちの倒錯した「寂しい」希望を映しだしているようにみえる。

2003年6月3日記